

G. William Skinner (ed.)

The City in Late Imperial China

秋山 元秀

一

一九六八年より六九年にかけてニューヨークのカーネギー財団の援助を受け、社会科学研究会の主催で、同会議の現代中国合同委員会とアメリカ学会連合協会の世話により中国社会学研究小委員会が開かれた。その中で二つの研究協議が中国の都市について議論するために充てられた。一回は六八年八月～九月にアメリカニューハンプシャーのポーツマスで、もう一回は同年十二月～翌年一月にバージン諸島のサンクルワ島で行なわれた。この会議に提出された論文をもとに、更にいくつかの論文をつけ加え、スタンフォード大学の中国社会学研究叢刊の一部として三冊に分けてその成果が公表された。ここにとりあげるのはその三冊目、近世末期の都市を取り扱ったものである。収録されている論文の数は一六。全体が「歴史における都市」「空間における都市」「社会システムとしての都市」の三部に分かれ、各々に編者スキナーが一つの論文といつてよい長文の序論をつけている。編者スキナーは現在スタンフォード大学人類学講座の教授。以前に彼の代表的論文「中国農村社会における市場・社会構造」^③はス波義信氏によつ

て詳しく紹介されたことがあり、業績についても触れられている。それ以後の主なものには『近代中国社会—分析的文献目録—』^⑤をあげる事ができる。

論文の著者と題目は左記のとおりである。(著者の下の()内の文字は、本書掲載の紹介記事による専攻分野。)

第一部

○序論—^{インペリアル}近代中国における都市発達—G・W・スキナー (人類)

以下第一論文と呼ぶ。

○中国都市の宇宙論 ^{コスモロジー}アーサー・ライト (歴史) 故人。

○城壁都市の形態論 張センドウー (地理)

○南京の変遷—一三五〇～一四〇〇— F・W・モート (歴史)

○都市の形成—台湾の三つの城壁都市における主動力と推進力— ^{イニシアチブ}ハリー・J・ラムリー (歴史)

○一九世紀中国の地域的都市化 スキナー 以下第二論文と呼ぶ。

第二部

○序論—中国社会における都市と農村— スキナー 以下第三

論文と呼ぶ。

○都市と地方システム ^{ヒエラルキー}の階層 スキナー 以下第四論文と呼ぶ。

○牙門と都市行政 J・R・ワット (歴史)

○寧波とその後背地 ス波義信 (歴史)

○市場町と水路—一四八〇～一九一〇の上海県— M・エルビ

ン (歴史)

○広東における学校と都市システム ^{アカデミー}ティレマン・グリム (中文)

○伝統的都市における拡張親族 ニクステン・グロフト・キンツン フュー・D・R・ペーカー

(中文)

第三部

○序論—清代中国における都市の社会構造 スキナー 以下第

五論文と呼ぶ。

○清初のギルド ピーター・J・ゴラス(歴史)

○学宮と都市神 ステファン・フォイヒトヴァンク(社会)

○都市の社会統制 シビル・ファン・デル・シユブレンケ

ル(社会)

○一九世紀台湾の一港湾都市の社会構造 ドナルド・R・デク

ロバー(人類)

○旧台湾における近隣儀礼結社 カルト・ファン・ニッセン クリストファー・M・シ

ッパー(宗教史)

これでもてわかると思うが、「歴史における都市」以下の三部区分はスキナー自身の問題意識の表明であり、各々の著者がこのような視点を念頭に置いて書いたものではなさそうである。その点であくまで本書は論文集として、批評は個々の論文に対し個別に与えられねばならないと思うが、先に刊行された二冊を併せれば合計四四篇、一六〇〇頁余の論文が「中国の都市」の名のもとに聚まり、また同様の主題をもつ単行本もいくつも見られるというアメリカを中心とした学会の状況は、近い将来これら個別研究をまとめるような業績が生まれることを暗示している。このような期待をもつて私は書評の筆をとった。

中国の都市についての研究はわが国においても決して少くはない。最近、斯波氏が研究動向をまとめて将来の展望を試みられて

いるが、そこに取り上げられた文献でも相当数にのぼるし、近く
の例では『アジア史研究』『アジア史論考』を繙いても十本に近
い都市に関する論文を挙げることができる。明清時代の社会経済
史の方面でも都市内の民衆の動向、都市―農村の経済関係などに
ついての関心が深まり、実績をあげているのも確かである。むしろ、
史資料が豊富で感覚的にも身近なはずの近代以降の都市につ
いての研究は極めて少ない。これは欧米とは全く逆で、日本の中
国近代史研究の偏りの特性を示す一つの例だと思う。

このような問題も含めて私は現在、斯波氏の試みられた法制史
の側からの展望だけではなく、各方面からの都市研究の展望が行
なわれなければならないと思うが、このスキナーの編著が従来の
日本の諸研究に比べて持つ大きな特色の一つは、非常に社会科学
的であるところである。即ち社会学・経済学そしてスキナーの場
合は特に地理学で開発された理論を用い、それを積極的に応用し
てゆき、そのようなものに疎い我々があれよあれよと目を見張っ
ている間に鮮かに結論が組み立てられる、という具合になるので
ある。これに対し日本の研究の多くはいわゆるシナ学的、あるいは
より一般的にいえば人文学的、歴史記述的である。といっても
制度史や社会経済史の観点から為される場合には、個々の都市を
あたかも一人の人間の如く徹底的にその個性を抉り出そうという
ような、すぐれて人文的な方法をとって個々の都市を取り扱おう
というような姿勢はあまり見られない^⑨。むしろ欧米人学者の野
外調査をもとにした研究に、このような方向性をもつものがある
のは皮肉である。もちろん欧米においてもすべてがスキナー的で
あるわけはなく、以前私達がトウィッチェットの唐代の市場シス

テムについての論文を読んだ時には何の異和感も持たなかったはずであり、今度のこの本でもアーサー・ライトの論考などはすぐれて人文学的なのである。

いづれ限られたスペースで、また評者の限られた能力で、このすべての論文を適切に書評することは不可能であるから、今回とりあげるのは一つの問題に絞りたい。即ち以上述べた社会科学指向の典型としてスキナーの五つの論文の内容をできるだけ詳しく追跡し、評者なりに再構成して批評してみようと思う。

二

スキナーの以前の論文が中国研究者に非常に新鮮な印象を与えたのは、集落あるいは中心地の設定に、県—鎮—村というような伝統的用法、あるいは史料の限界にとらわれることなく、統一的な仮説を適用し、^①典型的かつ定量的に地域社会の構造をとらえようとした点にあった。^②日本の中国研究ではこのような問題提起を受けた形で業績は今のところ数少ないが、^③欧米では中国に止どまらず、各国の前近代社会、開発途上国社会の「地域分析」が盛んに行なわれるようになっていいる。この書の一連のスキナーの論文は、自身の研究ならびに他の方法論的進歩を踏えて総括を試みたものといえよう。

(第一論文) 都市の世界レベルでの比較研究として従来から著名な、ワース、レッドフィールド、ショバード、マックス・ウェーバーなどの提唱する類型は、実際の研究にとってはほとんど意味を持たない抽象的なものだ。前近代都市・東洋的都市・中国的

都市などという現実にはあり得ないような包括的概念を立てて安易に一般的なものを探そうとする前に、個別的な時代・地域をふまえた具体像を明らかにする必要がある。そのためにはたとえば、都市の基本的要素のうち、時空的变化の中で、どれとどれがいっしょになるのか、ある機能が、スケールの移動、即ち対象とする地域の広さや都市の規模の変動と共に、どの程度変るのか、あるいは都市の形態は機能上の相異とどういう関係にあるのか、などという設問を解いてゆけば、中国の都市現象の変易の原因や結果、変動の方向、諸要素の体系的な相互関係などについても知ることができる。本書の目的も比較文化史的観点からみた総体としての中国都市の特性を明らかにすることよりも、中国都市の個々の間にある変化が体系的であり意味深いことを明らかにするところにある。それによってこそ秩序ある中国都市研究ができると考える。

本書の構成は次のとおり。第一部は都市の建設や拡張の過程、その形態や成長に影響を与える要因などを取り扱う。第二部は空間構造の中での都市を取り扱う。都市相互の関係、都市とその後背地との関係、より広い地域における都市などが問題となる。第三部は社会システムとしての都市。とりわけ都市の内部構造を取り扱う。換言すれば、第一部は都市の形態論、第二・三部は都市の機能を外と内よりみる。第三部には都市の社会生活の生態論という視点が加わる。

第一論文は続けてスキナーの中国都市論の序説にもなっている。ここで取り上げるのは、(一)、都市の分布の拡大や都市組織の発達において自然地形が非常に大きな影響を及ぼしていること。(二)、

唐代以降、主要都市は殆んど増加していないこと。(三)、中世の「都市革命」の原因。の三問題であり、これらは近世末期の都市発達に重要な意味をもつ。

(一)については主として分水嶺によって区分された八大地域が示され、その大地域のもつ独立性(これについてもいくつかのタイプがある)が強調され、この区分が歴史的にどれほど重大な意味を持ったかが繰り返し述べられる。大地域はさらに二次地域に分けられ大地域に次ぐ役割を果す。このいささか大時代がかった地理学の公理があまりに強調されるのは、いかに今までこのような見方がなおざりにされてきたとはいえ、地理学者からみればいささかおもしろいかもしれない、またこの分水嶺を指標とする地域区分は、たとえばロッシング・バックの農業地域区分よりもすぐれているものなのか、などという疑問がわく。しかしスキナーの場合、地域区分は人文的事象を説明するための自然の受け皿としてのみとらえられており、地域区分を最終の目的の一つとする地理学の立場とは異なる。

ただ大地域内も地勢条件によってその都市発達にも特徴があるという指摘、たとえば湖広地区や東南海岸は水系によって明確な二次地域が形成され、それらが自立しており、互いの中心城市の相互関係の深まりが大地域全体としての都市網の成熟を生む、四川や嶺南は二次地域は形成されるが、それらの中心城市よりはるかに高次の中心機能をもつ大都市が最初から存在し、その大都市の後背地が徐々に拡大して二次地域を自からの影響圏の中に取り入れ、大地域の都市網を発達させた、これらに対し、江南や華北は二次地域の規制がゆるやかで時代によってその数や範囲、さ

らに内部構造も変化しやすかったという意見は、都市発達の地域的視点として非常におもしろい。しかし地域強調のあまり、地域の枠を固定的に考え、地域を越える、枠組を破ろうとする活動に対しては消極的な評価しか与えられないのではないかという疑問が残る(スキナー自身触れてはいるが、二四ページの注)。

(二)の指摘は歴代地理志にみえる県城の数などの変動の研究に從來からみられるが、それは近世の都市発達とどのような関係にあるのか。人口増加と農村経済の商業化が深まるにつれ、空間的には一つの県域として、一つの都市によって統合されていた地域の中に新しい交易中心が生まれ、従来の県域を単位とするような統一性が崩壊する。鎮市の出現などを制度史の面からだけでなく、空間構造の変化という面からみようとという姿勢の提示である。

(三)の「中世都市革命」論は、加藤繁以来の研究をふまえ、唐宋間の社会経済上の革命的な変化を都市においての変動とともとらえるものである。市制・坊制の崩壊、新しい商業地区の出現等々をいうだけなら、何も新しい指摘ではないが、このような都市革命を一つの基本的パターンとしてそれを先の大地域区分と関連させた「地域循環」という概念の提案は有効である。即ち都市革命と呼ばれるものは、唐宋西北地区の長安を中心にした地域で発生し(長安サイクル)、北宋期の開封を中心とした華北へ移り(開封サイクル)、江南へは唐宋から南宋に至る間、揚州と杭州がその中心となったのであった。続いて元初に至るまでに泉州サイクル(東南海岸)がおこる。というように、全土の都市化を市広い時代と地域差に結びつけた。もちろんこれは一点の中心から伝播してゆくというような意味のものではなく、刺激を受けてその土

地の条件に応じた独特の経済空間構造を発達させていったものにはならない。

次の明清時代と比較して前代は全体としての都市網の発達は未成熟で、都市人口も偏在していたのに対し、後代は成熟した階層をもつ都市網が発達し、都市人口も平均的に分布していたこと、また前代は都市相互、都市農村間の較差が大きかったのに対し、後代は全体にバランスのとれた発展をめざしていること、海外貿易や技術的進歩は、むしろ前代に於てより進展していたこと、などは、十々十四世紀の都市革命によって形成された基本的枠組みの肉づけ、進歩の量的拡大、較差の是正、整備の過程として説明されるであろう。

しかしこの二つの時代の都市の伝統に対する態度の差、ひいては都市プランの差は、ここに一括して挙げられているが前述のような量的変化としてはとらえられない。一体にスキナーは機能的なものに比べて形態的なものに対して関心が少ないようである。

(第二論文) 民国時代初期でも中国都市の人口についての資料を検討したことのある人は、そのデータの不確さに苦勞した経験があろう。ましてやそれ以前の時代の地方志所載の戸口数や断片的資料から人口を推定することは極めて困難である。この論文は、一八四三年と一八九三年という五〇年離れた二つの時点について、先に述べた大地域の枠に従って都市化^{II}全人口に対する都市人口の割合を求めようとするものである。一八九三年光緒十九年というのは一八九五年の下関条約を契機として鉄道の設置、工業の展開など、社会の近代化が急速に進む直前の断面としてとりあげられ、一八四三年道光二三年は太平天国の混乱により全国的

に都市網・都市の内部構造が影響を受けたり、南京条約以降出現する開港都市の影響が加わる前の時点として意味がある。

この作業にあたっての資料の整理、データーの処理は東西の文献に通じ、あの大部の文献目録の編者であるスキナーの面目躍如たるものがある。それらの数値を人口段階^{スケーラ}(一千、二千、四千、八千という等比較数)、行政上の地位^{ステータス}(高位主要都市・低位主要都市・非行政的中心地)、経済的階層^{エコノミック・クラス}(原基市場^{プライマリ・マーケット}・中間市場^{セカンダリ・マーケット}・中心市場^{センター・マーケット}・地方都市^{ローカル・シティ}・大都市^{メトロポリス}・地域都市^{リジョナル・シティ}・地城^{テラ・シティ}・巨大都市^{メガロポリス}・中心巨大都市^{メガロポリス・センター})の三つの柱をたてて相互の相関関係をみようというのである。このようにして得られた結果は兩時期について各地域毎の数値が示され、全国平均すると各々、五・一%、六%という値が得られる(第四表)。そして単に数値を示すだけではなく、何故このような数値の地域差がでるのかについて、常識的な地域性の定性的説明によるのではなく、いくつかの指標を決めそれらを定量的に表現して説明しようと試みる。これは第一論文で、時空変化の中でどの要素とどの要素が、どのような関連をもつて変化するかを明らかにすることこそ有効な視点なのだ、と述べたことの実行である。そこにとりあげられたのは人口密度・職業分化の度合・技術の応用のすすみ方・商業化と地域内交易の進展・地域外交易の進展・行政的都市化の六指標であり、各々におそらく十を満点とする数値が与えられ、最後に各地域毎にそれらを合計し、それにある定数をかけて求めた値が、先に求めた一八四三年の都市化の値と極めて高い相関関係がある、というのがこの論証の展開である(第五表)。

一見して非常に鮮やかであるが、各々の指標に対して与えられ

た数値の説明は不十分で、結果を合せるために任意に数値を与えているとみられるふしもある。この手続きは再検討の余地がある。

論旨は更に各地域毎に都市人口のランクサイズ曲線を求め、地域の都市化の特性の説明にすむ。やはりこれも定性的に述べられてきたことをグラフを用いて定量的に鮮明にしたところを評価すべきであろう。しかしこれらの作業はスキナーにとって初步的な基礎作業にすぎないのである。

(第三論文) とつづく第四論文はこの書における一連の論文の最も主要な部分である。第三論文はまず中国における都市と農村の連続的關係、即ち地域構造全体の中で都市がどのように機能しているか、都市は農村をどのようにとりこんで都鄙連統体を構成しているのかを、更にもう一つは、中国文化において都市的生活様式はどのようなあり方をしてきたのかを論じている。

現実の地域は都市―農村という二分法、あるいは県―鎮―村という中国の伝統的三分法で単純に割り切れるものではない。そこに中心地という都鄙を越えた概念を用いる意義がある。そのもつ中心性を行政・経済上の機能や、距離・後背地の面積等で、階層区分していった場合、それを統合するのが地域システムと呼ばれるものである。第二部、空間における都市は、様々の角度からこの地域システムを明らかにすることを目的とする。ペーカーは親族結社を通じ、グリムは教育機関の分布を通じ、エルビンはやや広く水利事業の行なわれ方と市場町の発達を通じ、ス波はさらに総合的に都市システムにアプローチしている。

これに関連して、(一)、都市機能のもつ中心性はどのようなものか、(二)、都市システムは具体的にはどのようにして結合されてい

るのかの二点が問題としてとりあげられる。一体に中国では行政領域とその中心都市の呼び方は、個有名詞も普通名詞も同じであり区別できない。従ってある機能は、その城壁で囲まれた都市のもつものなのか、行政領域全体のもつものなのか分ち難い。特に儀礼の世界では空間的に全く未分化な中心機能がみられる(もつとも城隍神は都市民に対してのみ祀られている)。しかし現実には人や物や情報の移動を必要とする行政機能・経済機能においては自から核心地域と周辺地域では、サービス供給量の差が生じる。それらが複合されたものが都市の中心性の実体に他ならず、行政機能と経済機能の中心性のあり方の差に注目し、どのように複合されていくかを分析するのが次の第四論文の目的なのである。

次に中国の摺紳層はどのように都市的なのか。まず出身地をみると都市に居住するものも、もともと農村に籍貫を持つものが多く、個人としては都市的であっても集団としてはそうではない。別のことばでいえば都市居住者は一時的滞在者にすぎない。しかし先進地帯では近世後期に都市へ一族全部が移住することもみられるようになり、摺紳層の生活の基盤が都市的である割合も高くなる。

では旧中国には明確な都市文化は存在したか。摺紳層の文化は都市的なのか農村的なのか。読書人層の文化の差はその居住地の都鄙の差に還元できるか。一般にはこれらの設問に対しては否定的な見解が多い。伝統的儒教の理念ではむしろ農村を貴とするから、西洋のように都市にこそ生命がある、という思想は生まれにくい。むしろある時期には農村こそ文化の中心であったのだ。読書人の心の中では都市も農村もどちらも各々理想境であるという二

元性がある。居住地と本籍地の二元性、現役増紳と郷紳の二元性などはこの二元性に併行するものである。しかし近世になれば商業の発達と結びついて、都市文化、都市的生活様式といつてよいものを生み出してくる。スキナーの意見は、第一部で述べられているモートの意見などに比べ、現実にもえている都市的なものを理念の問題とは別に積極的に評価しようとしている。

(第四論文)は七七ページに亘る長大なものであるが、その論旨は、政治・行政機能によってできる中心地階層とそれにもなう地域システムを、社会・経済機能、特に商業機能によってできるそれからはっきり区別し、各々の構造と関係のモデルをくみみてることである。前者は国家官僚制によって作られたものであり、^{オランダ}公^式の中国を、後者は中国社会の自然な構造^{ナチュラ}を反映する(そしてここでも後者が地形による地域区分と一致することが強調される)。この両者は対等なものではなく、後者の基礎の上に前者が上部構造としてのつかるといふ形のものではあるが、前者にもそれ独自の論理があり、しばしば基礎と拮抗する。以下は経済的階層のモデルについて論じた部分、行政的階層のそれ、両者の関係を論じた部分の三部に分れる。

第一の部分は以前の論文のくり返しである部分が多い。整理されたモデルを四川省全体を例として、スケールを移動させながら適用していく過程は本書で最も鮮やかな部分である。そして数値だけによる簡単な一節ではあるが、大地域毎にこの地域システムが全国レベルで比較される。

一方の行政的中心地の階層は前者に比べればより簡単である。国都である北京の下には省都クラス(総督府・道台府等が含まれ

る)、府治クラス(直隸州・直隸庁を含む)、県治クラス(州・庁を含む)の三階層があり、それ以下は非行政中心である。そしてこれらの行政的階層の実体が、郵通上の地位、防禦軍事上の機能、収税機能など様々の政治行政機能を指標として検証されるが、評者の理解が不十分なため適切に紹介できない。

この両者の階層別の都市数を両軸にとって表にすればどのような相関があるかがよくわかる(第二〇表)。あたり前のことだが、行政的に高い階層にある都市は経済的にも高い地位にあるが、その逆は前者に比べればややばらつきがある。全体に正の相関があることはいうまでもないだろう。しかし注意せねばならないのは、両者のシステムの構造の差である。経済的中心地は、あるレベルの中心地が上位の中心地に結びつく場合、その相手は複数であることが多い(六角形モデルをみればわかる)。行政中心地の階層はそれに対し下位のものは唯一の上位のものと結ばれる。いわば一つ一つの中心地は完全に個別的なものである。前者は複雑な相互関係をもつ故に、結局最も自然な領域^{II}地形地域に落ちつくのに対し、後者は任意に自然を無視した領域の設定も可能である。

このような両者の性格の差があることから、中心地群だけの比較には相関関係が認められても、その中心地群の構築するシステムの整合関係は不完全なものになる。しかし例えば清朝の行政システムなどは現実の地域構造をうまく採用しているといえる。都市構造は社会全体の特性を見事に反映しているというのが、この議論の最後の定理なのである。

(第五論文)は都市内部の構造についての序論であり、先の経済機能と行政機能が都市内部の地域差を生じ、その相互の比重の

あり方は、都市全体の性格を反映しているという、都市内部機能論から生態論への展開がみられ、つづいて共同体としての都市に對して社会学的視点から分析が加えられる。

三

以上、スキナーの五つの論文の展開を私なりに構成して説明してきた。第三部に序説だけを書き独自の論文を書いていないのが惜しまれるが、彼の中国都市研究に対する方法は明らかにされたと思う。評語もところどころに雑えたが最後にまとめておきたい。

たとえば、中国の都市は唐代までは政治都市であった、その形態・機能などを規定する原理は政治・行政であった、ところが宋代以降はその原理に経済的なものが加わる、時代とともに変化するが明清時代には商業の発達とともに全国的に政治都市とは離れて経済機能をもとにした都市網の整備がすすんだ、というような説明は概説書などによく見られる。スキナーはこのような表現に甚だ不満なのだと思う。政治的・経済的とはもつと分析すればどういふことなのか。具体的には何を指標に選べばよいのか。そして各々の指標は時代の推移、地域の相異によってどのように変化し、相互に関連を持つのか。それらは数量で表現することはできないか。商業の発達というが、それは都市内で具体的にどのような景観に表現されているのか。……このような問いかけを重ねることによって一つ一つの説明が成立するのである。スキナーの所論から方法論として私達の学べきものはここにこそあると思う。もう少し具体的にいえば、

(一) 地域的な見方。先に述べたように水系のみに従がう地域区分には若干の危惧もあるが、歴史の枠組みとして地域の重要性をくみかえし述べているのには敬服させられる。特に原基市場圏(SMT)にはじまる経済空間Ⅱ生活空間の階層構造のモデルは、社会経済史上の様々の事象を地域的に考える時に有力な武器になる。このモデルは先の一九六四年の論文で既に提示されていたものであるが、今のところ中国史の場で十分に応用検討されているとは思えない。そして今後は各々のレベルの生活空間がどのように事物で充填されているかが追求されねばならないだろう。

(二) 分析的な見方。例えば第四論文でみた如く、ある中心地の行政機能を評価するのに、単に地方行政上の地位だけをみるのではなく、郵政上の機能、軍事上の役割等、いくつかの指標を通じて、各々の変化を検討した上で総合的な判断を出す、という方法。

(三) スケールの変化を含めた重層的な視点。経済機能にせよ行政機能にせよ、それぞれの中心地にいくつもの階層が区分され、また階層に対応するシステムが想定されるのだが、その際、その中心地の規模Ⅱシステムのスケールの変化によって、一つの事象もあり方が異なるし、そして生活空間が小さくなればなるほどその中身を分析することは困難になる。(一)と併せて地域の原理ともいふべきものである。

(四) 定量的表現。最近の社会科学で著しい傾向の一つではあるが、史料が計量化に耐えるものかどうかの検討、計量化の客観的規準を明確にしないと単なるスタイルの問題だけになってしまうことには注意せねばならないだろう。この点で第二論文などではやや説得力に欠ける部分があった。

スキナーの論考から学ぶものはこのような方法論上のことだけに止まらない。とりわけ広範な史料の用い方、我々の身近にありながら気のつかないような方法——たとえば下位レベルの中心地を求めるのに民国になってからの郵便局所在地を利用するなど——は示唆するところが多いと思う。また四川省全域を対象としたモデルの応用は、細部の点で異論もでると思うが、かつての論文で示されたいくつかの地域も含めて一種の古典的価値を持つてあろう。そして中国をフィールドとして一連の地域構造研究が生まれ、その積み重ねによって更に新しいものを創り出す刺激になろう。

感覚的に中国的とか東洋的とかいうのではなく、右のような研究によって得られたものを、同じ手続を経た西洋のもの、あるいは他のアジアやアフリカなどの地域のそれと比較する。それによってこそ本當の中国的なものの姿が現れる。第一論文の冒頭にのべたようにスキナーの立場は一貫して科学的である。しかし旅行記や隨筆、あるいは小説に描かれた都市、さらには私達が実際に訪問して感じた都市というものはどうなるのだろうか。それは心理学や社会学によって人間の姿がどれほど豊かに描かれ得るのか、という問題と一である。都市に住む人達の生きざま死にざま、都市そのものの生きざま死にざま。都市という一個の生きものと同との相克。ないものねだりであるが、このような問題に対してスキナーはあまり関心がないようである。

彼の中世都市革命論に倣えば、彼の六四年の論文は中国都市研究に対して革命的意義を持っていたと思う。そしてこの書は、その革命の量的拡大を示す。革命の波は次第に拡がりつつある。し

かし、かつての論文が持ったような新鮮な迫力には欠けるかもしれない。地理学の分野でも計量革命の時代は終わったという声を聞くし、わが中国にも文化大革命の再評価の動きがあるという。この書を足がかりとして我々の手で新しい都市研究の革命が成就されんことを願って評を終えたい。

書評が全体に亘らずスキナーのものに終始したのは最初にもことわったような考えからであるが、個々の論文に対しては十分な批評が加えられることを期待したい。特に、台湾を中心としてではあるが、フィールド調査や聞きとりにもとづいた具体的研究成果にみるべきものが多いと思う。その他、各論者が中国都市の特性について論じている部分をピックアップしていけば現在の欧米学界での考え方が追跡できるし、その中ではスキナーの考え方は少数かもしれない。多くの問題を提起する書物であるが、紙数もかなり過ぎてしまった。

なお、この書評は人文科学研究所明代研究班(小野和子班長)で口頭発表したもので、その際班員諸氏、特に森正夫氏、また石原潤氏からは有益な意見を伺った。それらを十分にとり入れていないことを恐れる。(一九七八年九月)

追記・アメリカ地理学者協会雑誌 *A.A.G.* の六八—二(一九七八)にはバネルという人の書評がでている。一般理論の定立を求める立場からのもので私にはあまり参考にならなかった。

① 最も早かったのは John Wilson Lewis ed., *The City in Communist China*, 1971. 〇〇〇 Mark Elvin & G.

- William Skinner ed., *The Chinese City Between Two Worlds*, 1974. 以下、本書。
- ② Social System という語を社会体系と訳す文献も多いが、最近の例に倣うそのまま使う。『社会学小辞典』有斐閣
 - ③ J. A. S. 24-1, 2, 3, 1964~65.
 - ④ 『東洋学報』四九二一、一九六六。
 - ⑤ *Modern Chinese Society—A Analytical Bibliography*—, 3 vols, Stanford Univ. Pr., 1973.
 - ⑥ 個々の論文を紹介するスペースがなかったのでせめて題目は訳しておく。但し、人名の読みのあやしさを含めて正確には原書を参照のこと。
 - ⑦ 筆者の見方は David D. Buck, *Urban Change in China: Politics and Development in Tsinan, Shantung, 1890-1949*, The Univ. of Wisconsin Pr., 1978.
 - ⑧ 「中国都市をめぐる研究概況」『法制史研究』二三、一九七三「中国都市をめぐる日本の研究—宋代を中心に—」*Sung Studies News Letter* 4.
 - ⑨ 斯波氏の寧波の研究は一つの例外であるが、氏の意図はむしろ逆に社会科学化の方向を向いていると思われる。
 - ⑩ 前注⑥の斯波氏評。石原潤「定期市研究における諸問題」『人文地理』二〇—四、一九六八、五二頁へ。また、D. W. English & R. C. Mayfield ed., *Man, Space, and Environment: Concepts in Contemporary Human Geography*, 1972, Oxford Univ. Pr. には「空間秩序」の章を中心地理論を現実の地域に適用して見事に成功した稀な例と評価され、その第一部が収録されている。
 - ⑪ 石原潤「河北省における明・清・民国時代の定期市—分布・階層および中心集落との関係について—」『地理学評論』四六—四、一九七三。
 - ⑫ Gilbert Rozman, *Urban Networks in Ching China and Tokugawa Japan*, 1973, *Urban Networks in Russia 1750-1800, and Premodern Periodization*, 1976, Princeton Univ. Pr. 但し、前者に対してはスキナーは手厳しく批評を加えている。また Carol A. Smith ed., *Regional Analysis*, Vol. 1 *Economic Systems* Vol. 2 *Social Systems*, 1976, Academic Press. 第一巻の方にはスキナー自身 Mobility Strategies in Late Imperial China: A Regional Systems Analysis という論文を寄稿している。
 - ⑬ 八大地域とは次のもの。() は私の試訳。North China (華北地区) Northwest China (西北地区) Lower Yangtze (江南地区) Middle Yangtze (湖北地区) Upper Yangtze (四川地区) Southeast Coast (東南海岸) Lingnan (嶺南地区) Yun-kwei (雲貴地区)
 - ⑭ バラージキの意見参照。彼の *Chinese Towns*. (Stanford University Press, Stanford, California 1977.) (xvii 820 pp. \$ 35.00)

(愛知県立大学学芸部)